
バカとテストと戦略眼

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと戦略眼

【Nコード】

N0473X

【作者名】

まあ

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の二次創作小説です。TRPGを趣味とする少女『真海天音』。彼女はTRPGで培った戦術を試すために召喚システムと言う特殊なカリキュラムのある文月学園に進学した。待ちに待った召喚システムを使った試召戦争が実践できるようになった2年目の春。彼女は思い通りの試召戦争を行う事が出来るんでしょうか？

第1問（前書き）

どうも、毎度、おなじみのまあです。

思いつきから格上げの新小説です。

かなりネタの多い作品のため、多くの方はおいてけぼりになるとは思いますが楽しんでいただければ幸いです。

また、作者はTRPGの知識はリプレイを読んでいるだけです。詳しい方はアドバイスをいただけると幸いです。

第1問

「ついにきました。待ちに待った時が」

少女は桜舞い散る坂を上り、そう呟くと目の前に映る少女が通い2度目の春を迎える事になる文月学園の校門を前にして言う。

「この門をくぐる者は、一切の希望を捨てよ」

「……真海、お前は朝から、何をおかしな事を言っているんだ？」

少女は決意を込めた瞳で物騒な言葉を言い切るとそんな少女の様子に大柄の男が少女の名前を呼びため息を吐くと、

「おはようございます。教官」

「……誰が、教官だ。真海、お前は朝からおかしな事しか言えないのか？」

「教官はダメですか？ それなら……ベルフト王子？」

「……深海、お前は何が言いたいんだ？」

少女は大柄の男に向かい敬礼をするが男は少女の行動について行けないようで眉間にしわを寄せると少女は男が『教官』では納得がいかなかったと思ったように少し考えると男を何かのキャラクターに例えているのか『ベルフト』と呼び、男は少女の言葉にもう1度、大きなため息を吐く。

「だって、西村先生、聞いて下さいよ。私が好きなアリアンロッドの『ベルフト王子』に西村先生はそっくりなんですよ。力強いところもですけど、先生、器用ですし、何より生徒に気配りができる事とか、『気配りのベルフト』の名に恥じないくらいにそっくりなんです！！」

「……真海、熱くなるのはかまわんがもう少し、状況を考えてくれ」
「状況ですか？ それはあれですか、どんな今回予告が出るんですか！！ コネクションは？ 関係は？」

「……いや、良い。それより、真海。これを渡すから、自分の教室に行くんだ」

しかし、少女の勢いは止まる事なく更なる加速をして行き、男は少女の勢いにどうして良いのかわからなくなったようで少女から目を逸らすと少女に一通の封筒を手渡し、

「これに今回のハンドアウトが？ キャラメイクはどうしよう？ やっぱり、王道のウォーリア／ウォーリアで行くべき？ それともアコライトは……状況が理解できる人か同類おなかもがいると最初に狙われるからダメね。シーフ／レンジャーかシーフ／ガンスリンガーも捨てがたいよね？」

「……真海、トリップするのはかまわんがクラスをしつかりと確認してきちんと自分の教室に行くんだぞ」

少女は封筒を手にぶつぶつと言い始めると男は眉間にしわを寄せて少女にキチンと封筒の中身を確認するように言う。

「は！？　そうでした。西村先生、すいません。少し、飛んでました」

「……元に戻ってくれて何よりだ」

少女はそこで正気に戻ったようで男を『西村教諭』と呼ぶとこの学園の生活指導の教師である『西村宗一』教諭は大きいため息を吐き、

「これに今年のクラスが書いてあるんですよね？」

「ああ」

少女は西村教諭から手渡されて封筒のノリの付いた部分をキレイに剥がすと、中からは1枚の紙が入っており、

「どのクラスかな？　無難にDクラスにはなれたと思うけど」

「まあ、真海の実力だと無難なところだな」

少女は少しだけわくわくしているようで紙を開くと、

『真海天音……Dクラス』

そこには少女の名前とこれから1年間過ごす事になるクラスが書かれており、

「予想通りですね……ファイアボルト」

「……真海、なぜ、お前はライターなど持っているんだ。これは没収だ」

「何を言っているんですか？ 情報はどんな些細なものだって隠蔽しないといけないのです。この情報が他の国に知られれば戦争の火種にだってなるかも知れません。誰の目にも触れる前に処理するべきなんです！！ ベルフト王子、フオーキヤスター軍師としての進言です！！」

自分のクラスを確認した天音はポケットからライターを取り出して封筒と自分のクラスが書かれていた紙を燃やすと西村教諭は天音からライターを取り上げると天音は西村教諭に状況を理解するように言うが、

「……良いから、もう教室に行け」

西村教諭は天音の相手をするのに疲れたようで彼女の背中を押すと、

「……ええ、私はこれからこのシェルドニアン学園に恥じない殺意と戦術を覚えて行きます。そして、その時はベルフト王子の右腕になって見せます！！」

「……ここは文月学園だ」

天音は校舎を見つめ、拳を握り締めて宣言するが西村教諭の言葉は酷く冷たい。

設定（前書き）

主人公『真海天音』の設定です。

召喚獣のデータは試召戦争が終了することに變更していくかも知れません。（苦笑）

設定

しんかいあまね
真海天音

所属 2 - D

性別 女

得意教科：日本史、音楽（130～150点）

苦手教科：数学、物理（90～100点）

総合得点：1438点

教科平均点：120点程度

備考

雄二、翔子と同じ小学校卒業だが別に友人と言うわけではない。

趣味はTRPGと言う少女。TRPG仲間の友人と戦術や戦略の話
を何時間でもする事が大好き。そのため、召喚システムと言う特殊
なカリキュラムだとゲームでつちかった戦略を行かせるのではない
かと言う理由で文月学園に進学する。ゲームが趣味なためファンタ
ジー系のゲームや小説も好んでいる。

性格は少しおっとりとしているがTRPGの話を始めると西村教諭
が引いてしまうくらいの勢いでまくしたて、西村教諭も問題児では
ないためか強く言う事ができないようにで苦笑いを浮かべている事が
たまに見られる。同じようにTRPGの戦術や戦略の話を始めてい
る時も同様である。

TRPG中は作ったキャラクターを演技する事も多いため、試召戦
争時にも自分で考えた設定で動き回る迷惑な一面も持ち合わせてい
る。

容姿は赤みがかった茶髪のロングヘアをサイドポニーでまとめて
いる。瞳は茶色で少し垂れ目気味。性格が表すようにぼわわとし
た柔らかい感じで笑うが一度、スイッチが入ると目つきは鋭くなる。

彼女をよく知るTRPG仲間は殺意様が憑依したと言う。
身長は小柄で細身だが不釣り合いなくらいの大きな胸をしている。
美人と言うよりはかわいい系の女の子。

成長の伸びしろとしては実在の戦史から戦略や戦術を学ぶ事を考え、
日本史、世界史、また、アリアンロッドのクラスのダンサーやバー
ドにはまる事で音楽にも伸びしろが見える。

召喚獣（天音評価 データ作成時）

メインクラス：ウォーリア

サポートクラス：ガンスリンガー

種族：ヴィーナ、アウリル狼族

ライフパス（出自：闇の一族、境遇：親友、目的：戦い好き）

キャラクターレベル：1

種族スキル：オーバーパス（1）

ウォーリアスキル：バッシュ（1）、ウェポンルーラー（1）、ス

ラッシュブロー（1）

ガンスリンガースキル：キャリバー（1）、ガンパレード（1）

一般スキル：アスレチック（1）、シックスセンス（1）

武器：キャリバー魔導銃、双銃仕様

防具：レザージャケット

第2問

（ここから統一帝になるための挑戦が始まるのね…… まあ、「冗談ですけど、クラスにはどんな人がいるかな？ 殺意をまとったお姫さまとか、鼻からバラを出す面白い人はいないかな？ まあ、いるわけがないんですけどね。ここは現実であって、ゲームの世界じゃないわけだし）

天音は自分があり得ない事を考えている事が少しだけおかしいようで苦笑いを浮かべて、これから1年間、同じ時間を過ごす事になるクラスメート達が集まっているDクラスの教室のドアを開けると、

「あ、天音ちゃん、おはよう。同じクラスだね」

「おはよう。美紀ちゃん、1年間、よろしくね」

去年、とあるイベントで仲良くなった『玉野美紀』が天音の姿を見て駆け寄ってきて、2人で挨拶を交わし、

「ねえねえ。天音ちゃん、今度のイベントでコスプレして売り子をしてくれないかな？」

「良いですよ。どんなのですか？ あまり、露出の多いのは恥ずかしいですけど」

「大丈夫だよ。天音ちゃんなら、どんな服でも似合うから、一先ずはこんなのはどうかな？」

「こ、これはシェルドニアン学園の制服じゃないですか？ それも

こんな細部にまで気を利かせているなんて凄いです!!」

「これで驚いたらダメだよ」

「こ、これはシエルドニアン学園のサバイバル包丁!? す、凄
いよ。美紀ちゃん!!」

教室の席は特に決まっていらないようで天音は美紀の隣にカバンを下
ろすと美紀としばらく話をしているがその内容は酷く濃く、2人の
周りにいた生徒達が2人から距離を取り始めた時、

『おはようございます。席について下さい。HRを始めましょう』

クラス担任が教室に入ってきて朝のHRが始まる。

（これと言って特徴的な人はいませんね。美紀ちゃんと……）

天音は始まったクラスメート達の自己紹介を聞きながら、特徴的な
クラスメート……言ってしまうえば1芸に秀でた生徒がいない事に少
しだけつまらなさそうにため息を吐き、

「美春は清水美春です。最初に言っておきますわ!! 男と言った
豚野郎と慣れ合うつもりはありませんわ!!」

（いた!! 面白いキャラクター!! どんな特殊能力があるの?
職業クラスを考えるとウォーリア/サムライと言った前衛タイプ
ね）

特徴的なツインテールをした少女『清水美春』が男子生徒全員を威
嚇するように叫び、天音は美春と言う少女を見て目を輝かせている

と、

「天音ちゃん、次は天音ちゃんの番だよ」

「あ、はい。ありがとう。美紀ちゃん」

天音の自己紹介の順番になったようで美紀がトリップ仕掛けしている天音の腕を突き、天音は美紀にお礼を言った後、立ち上がり、

「真海天音です。趣味はTRPGです。よく演じるキャラクターは冷静な軍師とかです。TRPGで培った戦術や戦略を駆使して試召戦争でクラスを勝利に導けるように立てた作戦が裏目らないように頑張りたいと思いますのでよろしくお願いします」

自己紹介を済ませるとクラスメートはTRPGと言う聞きなれない言葉に首を傾げているが、

「頼りにしてるよ。真海さん。最後は俺だね。今年、代表を任せられました。平賀源二です。上手くクラスをまとめられるかはわかりませんが一生懸命努力しますのでよろしくお願いします」

ざわつき始めているクラスメート達の言葉を遮るようにクラス代表である『平賀源二』が自己紹介を行いクラスメートの自己紹介が終わる。

第3問

(……代表は平賀源二くんか？ うん。言わせて貰えば指揮官としては無難なところかな？ 奇策とか奇襲は無理そうですね。そこは私がどうかフォローしましょう。それよりは……他の国と自国の戦力分析が重要ですね)

天音は自己紹介が終わると直ぐにノートを取り出して、現状で手に入れる事のできたクラスメート達の設定を書き込んで行き、試召戦争に使えるような設定をまとめていると、

「真海さん、何をしてるんだい？ ……戦力データ？」

「代表？ 待ってください！？ まだ、まとまってないんですから！？」

源二は天音の自己紹介で話をしておいた方が良いと思ったようで天音に声をかけると彼女が書いていたノートを見て首をかしげ、天音は慌てて隠すようにノートに覆いかぶさるが、

「いや、隠さなくて良いよ。それより、真海さんは本当に試召戦争をしたいみたいだね」

「それは、TRPGで培った戦略や戦術を使ってみたくて文月学園に進学したって言うのもありますから」

源二は天音の様子に苦笑いを浮かべると天音は少しだけ気恥ずかしそうに笑う。

「真海さん、それが戦力データだと言うなら、俺の得意科目や苦手科目とかを教えておいた方が良いかな？ 戦術や戦力を立てる上で必要になるだろ？」

「えっ！？ 代表、良いんですか？」

「うん。代表としてクラスの戦力を知るのは必要だし、俺はあまりゲームとかもするような人間でもないからそう言うのに詳しい真海さんがいてくれるのは心強いよ」

（……設定^{データ}の変更。代表は仲間を上手く使う術を心得ているか、最初から装備している。侮れないわ）

源二はクラス代表として天音に協力を仰ぎたいと言うと天音は源二の言葉に驚きの声をあげるが源二は当然の事だと言うと天音は口に出さないで源二の評価を少し上げると、

「みんな、悪いんだけど、試召戦争のデータ集めに協力してくれないかい？ 一先ずは得意科目と苦手科目……後は」

「総合得点も欲しいです。後は自分で思う自分の性格の長短所を」

「了解、総合得点と自分達の性格も教えて欲しい。試召戦争にかかわる事だから、なるべく全員が教えてくれると良いんだけど」

源二は自分だけではなくクラスメート達にも協力をして欲しいと言うとクラスメート達は代表である源二の言葉をむげにする事もできないと思ったようでぞろぞろと天音のそばに集まりだし、

「え、えーと、ま、待ってください。いきなり、こんなに設定^{データ}を渡

されても私はナヴァールでもマルセルでもないので処理しきれないです！？」

「天音ちゃん、落ち着いて。私も手伝うよ。みんな、メモ書きで良から自分の名前と代表が言った事をメモして持ってきてくれるかな？」

「……まったく、仕方ありませんわね。美春も手伝いますわ。豚野郎どもは美春の前に現れないでください！！ 豚臭いですわ！！」

「えーと、一先ずは男子は俺のところ。女子は玉野さんと清水さんのところ。真海さんはデータをまとめて」

「はい」

天音はクラスメイト達が自分の周りに群がりだした事に直ぐに対処できないように慌て始めると天音の様子に美紀と美春が手伝いを申し出ると源二は美春の様子に苦笑いを浮かべながら、クラスを仕切りだす。

第4問

「どうだい？ 充分なデータは取れた？」

「そうですね。これで自国の戦力は把握できました。次は他国で
ね」

「まだ、やるつもりなのですか？」

クラスの戦力をまとめ終わると天音は次の行動に移りたいようにノ
ートを5冊取り出してA、B、C、E、Fの各クラスの戦力データ
と表紙に書き、美春は天音の行動に呆れたようにため息を吐くが、

「美春ちゃんはわかっていません！！」

「へ？」

「あ、天音ちゃんのスイッチが入った」

その一言が天音のおかしなスイッチを入れる事になり、

「良いですか？ 今はクラスに人が分かれたばかりの状況です。言
つてしまえばこの文月学園に新たな6つの国ができたと言って良い
でしょう。できたばかりの国と言う事はまだ国主は民の信頼を集め
ていません。それを手にいれなければ国を領土を守る事はできない
のです！！」

「……た、玉野さん、真海さんはどうしたのですか？」

「えーと、これから、ちょっと長くなるかも、スイッチが入ったみたいだから」

天音は美春に説明しなければいけない事があると言うと席を立ち、黒板の前に移動して黒板に大きく現状で各自が理解しなければいけない事を書きはじめ、美春は状況が理解できないように顔を引きつらせるが美紀は苦笑いを浮かべると、

「良いですか？ 文月学園のクラス分けは成績です。となると現状では私達は無策で上位クラスに挑んでも負けます。ですから、勉強をして回復試験を申請して成績を上げてから仕掛けるのが常道ですが、私が調べた情報^{データ}では、過去の進級時、4月の2年生の試召戦争の開戦データから見れば遅くても1週間以内に試召戦争が起きます。この確率は9割を超えます」

「1週間って、準備も何もできないじゃないか？」

「だからこそです。準備ができていないという事は戦術も戦略もありません。ただのぶつかり合いです。となると破壊力の差、すなわち、成績の差で下位クラスは押し切られるのは明らかです。しかし、クラスをまとめ切れる代表と戦略を立て実行する者の2人が居れば私達DクラスでもAクラスは無理ですが、Cクラス、いえ、Bクラスまでは駆けあがれます！！それを成すために必要なのはデータです。各クラスの重要な人物は？部隊を引きいれる人間がいるか？策を立てて実行に移せるだけの人間がいるか？それを知れば対処も撃退もできます！！だからこそ、私達は調べ上げないといけないんです！！データは常に正義です！！」

天音は近いうちに必ず、試召戦争が起きると告げ、そのために、今、行うべきはデータ収集だと黒板を勢いよく叩いて吠える。

「誰でも良いです。他のクラスに誰がいるか、今は曖昧な情報でもかまいません。それを調べて真実にし、そこから作戦を導き出せば必ず勝てます！！ 一気に駆け上がりましょう！！」

「……凄いね。わくわくしてきたよ」

クラスメート達にDクラス以外の事でわかる事を少しでも良いから教えて欲しいと言うとすでにDクラスの生徒達は天音の雰囲気のみ込まれているようで天音の宣言に同調するように叫び、源二は彼の中にある何かに火が点いたようで小さく口元を緩ませた時、

「失礼します。代表の方はいますか？」

Dクラスの教室のドアを頭の悪そうな少年が開け、キョロキョロと落ち着きがなさそうに教室の中を見回した後、代表である源二に用事があるようで代表を呼んで欲しいと言うと、

「……早速、きましたね」

「俺達に宣戦布告をしにきた使者だって言うのかい？ やっぱり、Eクラスかい？」

「いえ、Eクラスは例年、部活に力を入れている生徒達が集まります。ですから、Fクラスだと思います。代表、すいません。話し合いには私も同席させていただきます」

「ああ。こつちこそ、お願いするよ」

天音は教室に入ってきた少年がFクラスの宣戦布告の使者だと言う

と源二は少年と対談するために天音は源二に同席を願い出ると源二は大きく頷く。

第5問

「代表、ちょっと待ってください。誰か、使者を招きいれて相手をしていてください。すぐに試召戦争の話をせずに世間話でも良いです。そこから、クラスにいる人間を1人でも多く聞きだしてください」

「え？ 直ぐに対応しないのかい？」

「……はい。少し、彼を見極めたいので、それに知った名前が出てくれば、去年のクラスメートからその人間の得意科目、苦手科目を知ることができます。そこから、春休みを踏まえた成長率の計算など、情報^{データ}を手に入れる方法があります」

天音は直ぐに宣戦布告の使者に対応しようとするが天音は源二を引き止め、クラスメートに使者の相手をしていて欲しいと言うと2人のクラスメートが頷き、使者と軽い口調で雑談を始め出す。

「良いのかい？」

「……はい。さっきも言いましたが、彼の使者としての能力。捨て駒なのか、宣戦布告の使者をできるような状況を理解出来て即座に対応できる人物であるかを確認します……使者はFクラス『吉井明久』？」

源二は天音の行動の意味がわからずに首を傾げると天音は使者の能力を確認したいと言い、ノートを手にとると雑談から聞こえる使者とクラスメートの会話から使者は天音の予想通り、Fクラスからの使者であり、天音はFクラスのノートを選び、使者の口から出る言

葉1つ1つに集中し始めると使者が『吉井明久』だと聞き、天音は一瞬考えるような素振りをし、

「……真海さん、彼がどうかしたのかい？」

「……確か、吉井くんは『観察処分者』ですよ？」

「観察処分者？　クズですわね。バカの代名詞ではないですか？」

天音の様子に源二が何かあったのかと聞くと天音は使者である明久が『観察処分者』と言う肩書きを持っている事を確認するように聞くと美春はただのバカだと言うが、

「……いえ、油断しないでください。観察処分者は確かに成績には問題ありますが、召喚獣で先生達の仕事を手伝っている分、召喚獣の操作が上手いはず。その経験値を考えれば彼を倒すのは難しいでしょう。何か他の手段^てを考えるべきですね」

「そこまでの評価がいるのかい？」

「……召喚獣の操作性はかなり重要になると思います。彼をただの低得点者と油断すれば必ず足元をすくわれます」

天音は明久を見下すと自分達の首を絞める事になると言い、

「……そろそろ、頃合いでしょうか？　美紀ちゃん、美紀ちゃん？」

「……玉野さん、真海さんが呼んでますわよ」

使者である明久が世間話に飽きてきた様子が見えてきたようで天音

は次の段階に移ろうとしたようで美紀を呼ぶが美紀からの返事はなく、美春は美紀を肘で突き、

「ご、ごめんなさい。ちょっと、私の中の天使ちゃんに出会えたから」

「天使ちゃん？」

美紀は天音に謝るが彼女の視線は明久から外れる事はなく、天音は美紀の様子に首を傾げる。

「……美紀ちゃん、さっき見せてくれたサバイバル包丁を貸して貰いたいんですけど」

「う、うん。良いよ」

「玉野さん、大丈夫かい？」

天音は今は美紀がおかしい原因を追及する時ではないと判断したように美紀になぜか朝に話をしていたコスプレの小道具を貸して欲しいと言うと美紀は直ぐに返事をするが天音の話は聞こえていないようであり、源二は美紀に声をかけるが彼女の反応は薄く、

「真海さん、玉野さんはこのままで良いのかな？」

「……現状で言えば放置がベストです。このままでは代表と使者が対談しないで吉井くんが帰ってしまう可能性があります」

「そう？ それなら、真海さん、使者との対談に同席お願いするよ……あの、真海さん、どうして、髪型を変えてるんだい？」

源二は天音の美紀を放置しておいて良いのかと聞くと天音はそのままにしておいて欲しいと言い、源二は頷くと明久との話し合いに移ろうと天音に声をかけるとなぜか天音はサイドポニーまとめている髪どめを外して髪を下ろすともう1つ髪どめを取り出し、ロングヘアの1部を左右にまとめ始め、源二は先ほどから理解できない事ばかりのクラスの女子生徒の行動に顔を引きつらせると、

「気にははいけません。これは重要な事です。今から私が演じさせて貰うあの方に敬意を込める意味もあります」

天音は必要な事だと言うが、なぜか彼女の右手には一見、本物に見える包丁が握られている。

第6問

「ごめん、待たせたね。俺がDクラス代表の平賀源二です」

「Fクラスの使者の吉井明久です」

明久はDクラスにFクラスからの宣戦布告の使者としてきたのだが、直ぐにDクラスの代表とは話す事が出来ず、去年のクラスメート達と話をすればらくすると代表の源二が現れてお互いに頭を下げ、明久が顔を上げた時に、源二の隣に1人の少女が目映り、

(……かわいい娘だな？ な、何で、あの娘は手に包丁を持っているの！？)

明久は少女に一瞬目を奪われるが、その少女は何故か右手に包丁を握りしめている事に気づき、頭が処理しきれないようで顔を引きつらせると、

「Dクラスの真海天音です。Fクラスの使者の吉井明久くんですね。ちよっとお願いがあってなんですけど」

「な、何かな？」

天音は少しだけ恥ずかしそうに目を伏せて明久にお願いがあると言、明久は天音のかわいらしい仕草に一瞬、彼女が握りしめている包丁の事など頭の中から飛んでしまうが、

「あ、あの。試しになんですけど、殺してみてもよろしいでしょうか？」

（いま、目の前で何が起っているんでしょうか？）

天音の口から出た想像の斜め上を爆走する言葉に明久の血の気は一気に引いて行く。

「それじゃあ、逝きますね」

「ま、待った！？ ま、まずは落ち着こう。だいたい、僕は試召戦争の話し合いにきたのであってこんな事を！？」

天音は笑顔で包丁を振りかぶると明久は天音に落ち着くように言うが包丁は無情にも明久の机の上に乗せられていた手に向かって振り下ろされ、明久は寸前で包丁を交わすと一気に後ずさりして教室の壁まで逃げると、

「ダメですよ。宣戦布告の死者なんですから、見せしめにならないといけないんですから」

「ちょ、ちよつと、この人は何なの！？」

天音は焦点の合わない瞳で明久を見てくすくすと笑うと明久は天音の様子に声を上げるが、

「それじゃあ、さようなら」

「い、命だけは助けてください！？ な、何でもしますから！？」

天音は明久の事など気にすることなく包丁を握る手に力を入れると明久との距離を縮めて行き、明久は天音の出すいような様子に彼の

本能が生命の危機と判断したようでその場で土下座をして本気で命乞いをする。

「何でも？ それなら、死んでいただけますか？」

「そ、それは無しで！？ 無しでお願いします！？ 何でもします！！ 何でもしますから」

天音は包丁を明久の首元に押し当てて笑うと明久の命乞いはさらにみつともなくなっ行って行き、

「……あの包丁ってレプリカじゃなかったかな？」

「……迫真の演技ですわね」

天音と明久の様子にDクラスの生徒達はどうしたら良いかわからないようであるが、

「そうですか？ 仕方ありませんね。ここで、私とする約束を守れますか？」

「ま、守ります！？ だ、だから、命だけは！？ 命だけは！？」

「わかりました。代表、それでは話し合いに移りましょう。吉井くんも座ってください」

天音はくすくすと笑いながら明久に命を助ける代わりに条件があると言うと天音の演技に完全に飲まれている明久は自分の身の可愛さに大きく頷き、天音は明久の返事に小さく口元を緩ませると明久に包丁を握っていない左手を差し出し、明久は彼女の手を握り立ち上

がると天音は改めて明久を源二がいる場所に移動し、明久に席に着くように言う。

第7問

「それでは改めて始めましょうか？」

「は、はい！？」

天音は明久と対面する事なく、明久の隣に座るとコスプレの小道具の包丁でいつでも明久の喉元をかつ切れると言いたげに笑うとすでに明久の中では包丁は本物として認識されているようで顔を引きつらせたまま頷き、

「それじゃあ、吉井くんだったね。Fクラスから俺達Dクラスに宣戦布告って事で良いわけ？」

「Fクラスと私達の間にはEクラスがいるはずですが、私達を最初の相手に決めた理由はあるんですか？」

「い、いえ、ゆ、雄二が最初はDクラスを相手にすると言ったので」

源二は明久にFクラスが本当にDクラスに試召戦争を仕掛けるつもりかと聞くと天音は明久の隣で包丁を焦点の合わない瞳で見つめながら、Eクラスが相手じゃないのかと聞くと明久は天音に完全に怯えているようで『雄二』と言う生徒がDクラスを相手に選んだと言

い、
「雄二？　それがFクラスの代表ですか？」

「は、はい。『坂本雄二』と言うゴリラにも似た不細工な男が僕達Fクラスの代表です」

天音は明久に雄二と言う生徒の名字を確認すると明久はFクラス代表のフルネームを『坂本雄二』と答え、

「坂本雄二？」

「真海さん、どうかした？」

「……いえ、『今』は良いです」

「そうかい」

天音はその名前に心当たりがあるようで小さくつぶやくと源二は天音に声をかけるが天音は他のクラスには情報^{データ}を渡したくないように『今』と言う部分を強調して返事をする。と源二も天音の様子に何か気付いたようで頷く。

「それで、あの、試召戦争を受けてくれるのかな？」

「それは……」

「受けます。当然です。下位勢力からの宣戦布告は断れないルールですから」

明久は天音が隣にいるのが居心地が悪いようで早く宣戦布告をして教室に戻りたいように宣戦布告を受け入れてくれるかと聞くと源二は天音の考えを聞きたいように彼女に視線を送ると天音はルールだからと頷き、

「そ、それじゃあ、開戦は午後からって事で、僕はこれで帰らせて

もらい!? な、何?」

「……下位勢力の使者の運命など決まっていますわ」

明久は逃げるようにDクラスを出て行こうとするがやはりDクラスの生徒は下位クラスのFクラスからの宣戦布告が気に入らないよう
で美春を先頭にして明久の逃げ道を潰しており、

「ま、待つて!? は、話し合おう」

「話し合い? 必要ありませんわ」

「待つてください。吉井くんはFクラスからの使者です。暴力は止め
ましょう」

明久は話し合いを要求するが美春は話し合いをする気はないと言っ
た時、先ほどまで迫真の演技で明久を翻弄していた天音がDクラス
の生徒達の行動を止める。

「真海さん、どうしてですか? この豚野郎はFクラスから傷めつ
けても良いと言う前提で送られてきた使者ですわ。八つ裂きにして
窓の外からぶら下げておいても何も言われませんわ」

「約束ですから、約束をきちんと守っていただければ、『命だけ』
は助けるとそうですよね? 吉井くん」

「は、はい!？」

美春は下位勢力の使者などどうしても言いと言うが天音は右手に包
丁を握りしめて明久とは『約束』があると言うと明久は大きく首を

縦に振り、

「それでは約束です。Fクラスの人達に私達と何か話したか？ もしくはそれと似たような事を聞かれたら『何もなかった』と答えてください」

「そ、それだけ？」

「はい。その代わり、約束を破ったら試召戦争の勝敗に関係なく……あなたには死んでもらいますよ。吉井くん」

天音は明久を無事に帰す代わりの条件を話すと明久はたいした事ではなかったため、首を傾げるが天音は焦点の合わない瞳で約束を破った時の責任は覚えておいて欲しいと念を押し、

「わ、わかってます!？」

明久は大きな声で返事をする。と天音と自分へと暴力を振るおうとしていたDクラス生徒から逃げ出すように教室を出て行き、

「真海さん、あれで良いのかい？　なんか思っていたより、無理難題も出さなかったし、直接、Fクラスの事も聞けたんじゃないのかい？」

「いえ、あれで良いんです。代表や私が話を聞けば警戒するはずですから聞きだしたいものは手に入らない事が多いでしょうし、それに戦火の中で咲く花の種は任せていただきましたから、後は栄養を与えてあげるだけです」

源二は天音が明久との対談を早々に打ち切った事に違和感を覚えた

ようで天音に聞くが天音は小さく口元を緩ませ、

「開戦は午後からです。今はやれる事を全員で行いましょう!！」

右手の包丁を高く掲げて叫ぶとDクラスの生徒は天音の声に呼応する。

第8問

「……坂本さんの相手ですか？　どんな作戦を考えてくるでしょうか？　吉井くんから聞き出せたメンバーを考えると土屋くん、木下くんには気をつけないといけないでしょうし」

明久がFクラスの教室に戻った後、天音はクラスメイトからの他国ほかのクラスの情報収集を源二と美春に任せると明久が口を滑らせた情報からFクラスの戦力を分析しようとするがFクラス代表の『坂本雄二』の名前とそれ以外にも『土屋』と『木下』と言う生徒の名前をつぶやき考え込んでいると、

「真海さんはFクラスの代表の事を知っているのかい？　さっきは吉井くんの前では話したくなかったみたいだけど」

「代表？　はい。同じ小学校に通っていました。クラスが同じになった事はありませんが、当時は勉強のできるあまり可愛くない子供と言う印象でした」

「えーと、俺も噂くらいは聞いた事があるよ。神童って呼ばれていたんだよね？」

源二は他の男子生徒に情報収集を任せてきたようであらうで考え事をしていて天音の姿に作戦を考えているのに行き詰っていると思ったようで彼女に声をかけると天音はFクラスの代表である雄二の事を知っているといい、源二も昔の噂を聞いた事があると言っ。

「はい。ある事件がなければ名門進学校である霜月大学の付属中学に入れたと言う話です」

「そんなに凄かったのに今は最低クラスなのかい？」

「はい……そのせいと言って良いかは私にはわかりませんが、中学時代はケンカばかりしていましたから、堕ちた神童、悪鬼羅刹と今も言われていますね」

「なら、そこまで、警戒しなくても良いんじゃないかな？ 今は最低クラスなんだし」

天音は同じ小学校出身と言う事で雄二がエリートコースから外れた理由を聞いた事があるようで眉間にしわを寄せると源二はあまり警戒する必要はないと思っているようであり、天音に気にしないように言うが、

「……いえ、彼を最低クラスと判断してはいけません。彼は小学生時代に高校の教科書でも勉強してしたとも聞きます。もしかしたら、今もその理解力は健在かも知れません。ただ……」

「ただ？」

「お勉強ができれば作戦を立てられると言うわけではないと言う事を教えてあげようと思います。私が昔、噂で聞いた彼ならば面白い戦いになると思います」

天音は雄二を危険な相手と認識していながらも雄二との対決を心待ちにしているようにも見え、

「面白い戦い？ 真海さん、クラスの代表として言うておくよ。あまり、試召戦争を私物化しないようにね。君が作戦や情報収集の重

要さを教えてくれた事には感謝してるけど、みんながみんな、君に従うかはわからないんだからね」

「わかってます。私ができるのは作戦や戦術を考えるだけです。それが実行できるかは皆さんしだい、そして、相手しだいです。だから、私は勝てる確率をあげる作戦や戦術を考えるだけです。Dクラスの勝利のために」

「そうだね。わかっているなら良いよ」

「はい。フォーキャスター軍師だけでは戦争はできません。それを支えてくれる皆さんの事、守るべき国主だいひょうの事を考えた作戦や戦術を立てたいと思いますのでよろしくお願いします」

「うん。頼りにしているよ」

源二は天音にもっとクラスメート達の事を見て欲しいと言うと天音は承知していると大きく頷き、源二は天音がクラスのために頭を動かしているのもわかるようで天音に笑顔を見せる。

第9問

「……噂は広がってますね」

天音は明久に約束を取り付ける過程で明久の口から発せられた『命ごい』をしっかりと録音しており、その命ごいとともに明久が自分が補習室送りにならないために『Fクラスの生徒の情報』を引き換えにしたと言う噂を流しており、開戦を前にその噂は学年全体に広がり始めている。

「……吉井くんを安全に返したのはこう言う事かい？」

「卑怯だと責めますか？」

Fクラスとの試召戦争前に天音は最初のカードを切ると源二は天音の作戦に少しだけ不快感を覚えたようで眉間にしわを寄せると天音は自分でも卑怯な事をしている事を知っているようで表情を引き締めたまま答えると、

「……いや、作戦は任せると言う話もしたし、でも、こんな作戦では真海さんの信頼してもらえないとは思えないよ」

「しかし、策としては無難な策です。それに集めさせて貰ったFクラスの生徒の性格を考えるとこれ以上の策はないです。もしかしたら、こんな事をしなくてもみなさんはFクラスに負けないと言うかも知れませんが先ほども言わせていただきましたが、吉井くんは危険です。成績はあまりよくありませんがベル……西村先生を1年間困らせている実績は成績だけではない何かがあります。彼をクラスメートから引き離すのは必要な事です」

源二は卑怯な方法では天音がクラスメート達から信頼を得る事はできないと言うが天音はそれを知った上での作戦だと言い、

「代表、すいませんが開戦時に私は前線に出ます。クラスのみなさんから信頼を勝ち得るために後ろで策だけを弄しているわけにはいきませんから」

「……止めても無駄そうだよな」

「天音ちゃん、実は好戦的だしね」

天音は源二に頭を下げると開戦時は源二のそばで作戦や指示を出せない事を謝ると源二はため息を吐いて頷き、美紀は天音の行動に苦笑いを浮かべる。

「そ、そんな事はありませんよ!？」

「とか言いながら、召喚獣がどんな装備をしているかをみたいんだよね? 前線で戦えるなら、前線で指揮を執りたいんだよね?」

フォーキャスタール

「ち、違いますよ!?! 今回は軍師を演技したいから杖とローブが良いな? とか思ったり、でもでも、召喚獣はしつぽがあるから、ヴァーナっぱいから、ウォーリア系の装備の方が似合いかな? とか、考えてないです!! 素早い動きのヴァーナが縦横無尽に戦場を駆け抜ける姿を想像なんてしてません!!」

天音は美紀の言葉を否定しようとするが慌てたせいか、その口からは召喚獣がみたいと言う本音が駄々漏れであり、

「……何か、真海さんが試召戦争を心から楽しんでいる事はわかるよ」

「……ですわね」

源一と美春は天音の様子に大きくため息を吐き、クラスメート達は天音の慌てる姿に今までとは全く違う印象を持ったようで笑いをこらえていると、

「そ、そんな事はない事もないですけど！？　ち、違うんです！？　わ、私は戦闘好きじゃないです！！　で、でも、たまに『殺意様』が降りてきてしまう事があるだけで！？」

「いやいや、ここは否定しようよ」

「あ、あう」

天音はクラスメート達の視線に恥ずかしくなってきたようで顔を真っ赤にしてうつむいてしまい、

「……まったく、真海さん、行きますわよ」

「は、はい」

美春は天音の様子に少しだけ冷静にさせた方が良かったように廊下近くまで天音を引きずって行く。

第10問

『吉井を殺せ！！』

『裏切り者には死の鉄槌を！！』

屋上で作戦会議を行っていたFクラスの主力メンバーである明久、雄二、『木下秀吉』、『土屋康太』、『姫路瑞希』、『島田美波』の6人が教室のドアを開けるとクラスメート達が次々と明久へ殺意を向けて襲いかかる。

「な、何！？ 裏切り者って、僕は何もしてないよ！？」

「お前達、落ち着け。いったい何があったんだ？」

明久はクラスメート達の様子に死の危険を感じ取り、顔を真っ青にして自分の無実を主張し、雄二はクラスメート達に何があったかと聞く。

『聞いてくれ。代表、裏切り者の吉井明久は宣戦布告の使者をした時に殺されそうになったから、自分の身の安全と補習室送りにならない事を条件に俺達の情報を売り渡した裏切り者だ！！』

「なんですって？ 吉井、あんたね」

「ちょ、ちょっと待ってよ！？ み、美波、落ち着いてよ！？ ぼ、僕はそんな事はしてないよ！！」

クラスメート達は天音が流した明久が自分の身の可愛さに自分達の

情報を売り渡したと言う噂を完全に信じているようで明久を血祭りにしなければ気がすまないようであり、明久を引き渡すように叫ぶと美波はその言葉を信じたようで明久の腕をつかむ。

「……なるほど、明久を無傷で帰してきたのはこう言う事か？」

「雄二、こう言う事とはどう言う事なのじゃ？」

「……簡単な事だ。本来、下位勢力からの宣戦布告の使者なんて上位クラスから見れば見せしめにリンチを受けるはずだ。俺も明久ならどうなっても良いから、明久を使者に立てたわけだしな」

「雄二、貴様、やっぱり、そのつもりだったんだな！！」

雄二は今の状況を全て理解したようで舌打ちをするとこの状況を収めるために自分が明久を宣戦布告の使者にした理由を話し始めるが明久は雄二の言葉が許せなかったようで彼を怒鳴りつけるが、

「役に立たないんだ。他に使いようもないしな」

「何だと！！」

「実際、その通りだろ。お前がぼこれればこんな不利な状況にならなかったんだよ」

雄二は明久を役立たずだと言い、2人はにらみ合いを始める。

「あ、あの。坂本くん、不利な状況と言うのはどう言う事でしょう？」

「ああ。明久は悪知恵が効くからな。中堅部隊の指揮を執って貰おうと思っただけだが、この状況じゃ、誰もこのバカの指示には従わないだろ。まあ、この程度では俺の作戦は崩せないけどな」

瑞希は雄二の言葉に不安そうな表情をすると雄二は小さくため息を1つ吐き、部隊を任せられる1人を潰されたと事を話すが彼は試召戦争前に策を弄してきた人間がいる事に少し楽しくなってきたように口元を緩めると、

「ちょっと、坂本、大丈夫なの？」

「当然だ。ただ、明久」

「な、何？」

「お前を嵌めたのはどんな奴だ？」

美波は試召戦争に勝てるのか不安そうな表情をするが雄二は強気なままであり、噂を流した生徒の事を知りたいようで明久に声をかける。

「えーと、僕を無傷で帰してくれるって言ったのは、真海天音って娘だよ。えーと、一言で言うなら『殺可愛い』感じの女の子？」

「……殺可愛い？ 意味がわからないぞ」

「難しいんだよ。顔はもの凄く可愛いんだよ。背も小さくて一見、守ってあげたくなるような女の子だけど、背中に真っ黒な殺意をまとって……包丁を振り回していた」

「……明久、お前に聞いた俺がバカだった。現実と妄想が理解できないなんてな」

明久は雄二に天音の印象を話すが雄二は明久の言葉を信じる事なく大きなため息を吐く。

第11問

「美春は真海さんの指揮に従いますわ。ですから、落ち着きなさい」

「は、はい。すみません」

「始まりましたわ。行きますわよ」

美春は先ほどまでは自信に満ちていたはずの天音が小さくなっている様子にため息を吐き、天音が美春に頭を下げた時、試召戦争の開戦時間を告げるチャイムが教室に響き渡り、天音と美春を中心としたDクラスの先行部隊が廊下に駆け出して行く。

「あれですわね。真海さん、行きますわよ」

「は、はい。Dクラス真海天音」

「同じく、清水美春がFクラスの豚野郎どもに現代文勝負を挑みますわ！！ 試^{サモン}獣召喚！！」

「試^{サモン}獣召喚です」

美春は廊下の先にこちらに向かって駆け出して来ているFクラスの生徒を見つけると天音に声をかけて2人で召喚獣を呼び出すと天音と美春の足元には機械的な魔法陣が描かれ、『ポン』と言う小さな音とともに2体の召喚獣が現れ、天音の召喚獣は1対の魔^{キャリバー}導銃にレザージャケットを装備したガンナータイプ、美春の召喚獣はグラディウスにロリカ・セグメンタタを装備したローマの剣士タイプである。

「行きますわよ……し、真海さん？」

「み、美春ちゃん、見て。か、可愛いよ！！ 私の召喚獣は魔導銃だよ。それも双銃仕様だよ！！ レザージャケットだし、これはヴァーナのサブクラスはガンスリンガー、メインクラスはウォーリア？ それとも、シーフが良いかな？ いや、ツヴァイクンと同じが良いからメインクラスをウォーリア、サブクラスをガンスリンガーに決まりだよ！！ 美春ちゃんの召喚獣はメインクラスはウォーリア、サブクラスはサムライかな？ こっちはあつちは？」

「……真海さん、落ち着いてください」

美春は呼び出された召喚獣を見て、Fクラスに攻撃を仕掛けようとするが天音はこの場に呼び出された召喚獣を見てテンションが上がっているようであり、美春はそんな彼女の様子に頭を押さえる。

「す、すいません。それでは行きます。良いですか！！ 点数差がありますからFクラスは連携をとってきます。必ず、1対1、もしくは点数差があってもこちらに人的優位立つようにしてください！！」

「了解しましたわ！！ 真海さんは装備が銃なのですから、後ろに下がってください！！」

天音は美春の声に冷静になったようで、大きく深呼吸をするとDクラス生徒に指示を出し、美春とDクラスの生徒はFクラスの生徒に向かい駆け出して行く。

『良いか！！ 代表の言っていた通りにまずは指揮官を潰すんだ！』

！ 指揮官はあの銃を装備した召喚獣を使う奴だ！！」

「真海さん！！ 逃げてください！！」

「……美春ちゃん、違いますよ。これは銃ではなく、キャリバー魔導銃です。そして、武器を持った人間が後退する事などあってはいけません！ 戦士は常に顔をあげて戦場を見据えるべきです！！」

Fクラスの生徒は指揮官を先に潰すように指示を出されているように天音に向かい、5人の生徒が天音に飛びかかるように攻撃を仕掛けてくるが天音の召喚獣は後方に飛び、空中でキャリバー魔導銃の引き金を引くと、

「……なるほど、行けますね」

キャリバー魔導銃の銃口からは光が放たれ、Fクラスの生徒の召喚獣を撃ち抜いて行き、その様子に天音は口元を小さく緩ませると天音の召喚獣は着地と同時に3体の召喚獣に囲まれて押され始めている美春の召喚獣の援護に駆け出していく。

第12問

『指揮官が駆け出してきたぞ!! 狙え!!』

「真海さん、何をしているのですか!？」

天音の召喚獣が駆け出す様子に気づいたFクラスの生徒達の召喚獣は天音の召喚獣に群がるが、

「……甘いです。ガンスリンガーが後方でしか攻撃をしないと知らないと思います」

「戦死者は補習!!!!!!」

天音の召喚獣は魔導銃キャリアーの銃身で攻撃を受け止めると後方に飛び、次々とFクラスの生徒の召喚獣を撃ち抜いて行き、Fクラスの生徒は西村教諭に補習室に運ばれて行く。

「あ、あの。真海さん、あなたは どうして、そんなに召喚獣の扱い方が上手いのですか？」

「どうして? 決まっています。それはキャラクターにこの子に向けた『愛』です!!」

「そ、そうですか」

美春は天音の召喚獣操作が自分を含めた生徒達より、1ランク以上上手い事に疑問に思ったように首を傾げると天音は何の迷いもなく言い切り、天音以外の生徒はDクラス、Fクラスともに天音の様子

に少しだけ気落とされたようで彼女から1歩下がると、

「行きますよ。美春ちゃん！！　今が攻めどきです！！　戦場に出
ていながら、自分の身を守るだけにしか剣を振るえないような人達
に負けるわけにはいきません！！」

「は、はい。わかりましたわ」

天音はFクラスの様子にDクラスに突撃指示を出し、Fクラスの生
徒は次々とDクラスに狩られて行き、

『ちっ！？　撤退だ！！　戦線を下げるぞ。木下の部隊に援護を頼
むんだ。点数が減った人間は回復試験を』

「真海さん、追いかけますか？」

「……いえ、私達の点数も減っています。私達はFクラスより、戦
場に出てきた生徒は少ないです。それにあまりにもFクラスの生徒
達が不甲斐無いですから、このまま攻め込んでしまうと伏兵が待ち
構えていて足元を救われる可能性もあります。教室に伝令、部隊を
入れ替えましょう。中央階段は他の階に伏兵を潜めてあり、私達が
先行した場合に挟み撃ちにされる可能性があります。この場所です
ばらく待機します。増援部隊が合流したら点数の減りの激しい生徒
は回復試験にそれ以外は伏兵の確認に移ります」

Fクラスの先行部隊は撤退を始め出し、Dクラスは前のめりになり
ながらFクラスを追いかけようとするが天音は伏兵を警戒している
ようで中央階段の手前で部隊を止めて教室に伝令を出す。

「……………真海天音を発見。伏兵も読まれている」

「……そうか。戦術がわかる奴がいるとはな。前のめりになつてくれれば戦力を削れたんだがな」

Fクラスは天音が警戒していた通りに伏兵を用意していたようで伏兵部隊を率いていた康太は無線を使用して代表の雄二に連絡を取ると無線機の先で雄二は舌打ちをした後、

「ムツツリーニ、伏兵が読まれているなら、ばれないように伏兵を撤退させる。伏兵がいるように思わせればそれで良い。その場所ですまっていますくれれば俺達にとって好都合だからな」

「……………了解、伏兵を撤退させる」

「後はお前の情報網でわかる事で良い。教室に戻ったら真海の情報を見せてくれ」

康太に伏兵の撤退を伝え、康太達伏兵部隊はDクラスから仕掛けられる前に撤退を開始する。

第13問

「……そうか」

「雄二、真海さんについて何かわかったの？」

雄二は康太から、天音の情報を聞いて眉間にしわを寄せると明久は雄二が次の作戦を思いついたのかと聞くが、

「……真海天音か？ まったく、どう言う人間かわからん」

「そうなの？」

雄二は康太の情報と伏兵を読んだり、宣戦布告の使者を逆手に取った天音の人間像が重ならないようであり、大きく肩を落とす。

「ムツツリー二が持っていた。去年の真海の情報では真海はおつとりとした人間だ。わかりやすく例えるなら姫路タイプだろ。それなのにさつきは前線で部隊を指揮するだけではなく、先陣に立っていた。それどころか、明久をはめて、こつちに楔まで打ってきたんだぞ。戦術とか戦略とかわかるように思えるか？ もしかしたら、真海を使つて裏で作戦を立てている人間がいる可能性もあるしな」

「確かにね。仮にどつちかが演技だとしたら、秀吉と同程度の演劇の才能があるって事だよな？ 秀吉、真海さんって演劇部じゃないの？ それとも、本気で僕を殺そうとしていたのかな？」

「うむ。まったく、聞いた事はないのじゃ。仮に明久の言う通り、それが演技だとしたら、勧誘したいところなのじゃ」

雄二が天音の人間像が見えないと言うと明久はDクラスでの天音から向けられる殺意を思い出したようで血の気が引いてきたようで顔を真っ青にすると教室は天音をどう言う扱いをして良いのかわからないように首を傾げるが、

「まあ、だからと言っても俺のとおきの作戦は読み切れないだろ。戦況にはまったく問題はない。秀吉、島田は戦線を維持する事に力を注いでくれ。戦死者はなるべく出さないように入れ替えながらだ。明久、お前も付いて行け。お前は罠にはまったんだ。華々しく戦死でもしてこいよ」

「戦死しろ？ いやだよ。僕は観察処分者なんだから、攻撃を受けると痛いんだよ」

「良いから行け。少なくともそんな事を言っていたら、勝っても負けてもFクラスにお前の居場所はないと思え、次の試召戦争はお前にやって貰う事もあるんだ。少しでも信頼回復する事を考えろよ」

雄二はそれでも自分達Fクラスの勝利は揺るぎないと思っているようにであり、秀吉、美波に指示を出すと明久には死んでこいと言い、明久は観察処分者には召喚獣の受けたダメージが召喚者にも反映されるため、嫌そうな表情をするが雄二は明久の信頼を少しでも回復させる必要があると言う。

「……わかったよ。行けば良いんだろ」

「明久、お主は召喚獣の操作が上手いのじゃ、頼りにしておるのじゃ」

「う、うん」

納得はいかなさそうな明久の様子に秀吉が声をかけると明久は何故か頬を赤く染めて頷き、3人は廊下に駆け出して行き、

「ムツツリーニ、引き続き、真海の情報調べてくれ。どんな些細な事でも良い。他にも真海を使って自分は裏で策を弄している奴はいないかもだ」

「……………了解」

雄二は3人の背中を見送ると教室に残っていた康太に引き続き、天音の情報収集を頼み、康太は教室を出て行く。

第14問

「……伏兵はなさそうですね」

「と言うより、撤退したって感じですね。わざとらしく、人がいる形跡を残してあります」

Dクラスの増援が合流し、天音と美春は数名の生徒を連れて中央階段から伏兵を警戒するために他の階を見て回るがFクラスの生徒は見えない。

「撤退ですか？」

「はい。伏兵は成功すればかなり有効な手段ですが最初の攻撃で私達が勢いに任せたまま中央階段を超えなければ置いておく意味がないですから」

「……あのまま、進んでいたら挟み撃ちになったと言う事ですか？」

「そうですね……」

天音はDクラスに伏兵を意味がなくなった事を説明すると次の雄二の手を考え始めるがこれと言ったものは出てくる事はなく、

「一先ずは1度、生徒を残して教室に帰りましょう。坂本くん最後の1手を予測しないといけません」

「最後の1手ですか？」

「はい。先ほど、集めさせて貰ったデータから考えるとFクラスで代表を倒せるのは現状で言えば土屋くんの保健体育のみ、後は2人もしくは3人で代表に襲い襲いかかる事、Dクラスは新校舎の隅ですから、保健体育のフィールドを展開するのは警戒ができます。現状の成績差では2人か3人を無傷で代表のところまで運ぶ戦力はFクラスにはありません。勢いに任せた突撃は無謀です。私がFクラスの指揮官ならこんな愚策以下の策は執りません。坂本くんの事です。勝機があつてDクラスにしかけてきたはずで、見落としていた情報^{データ}がある可能性があります。ですから、情報^{データ}の見落としも考えられるので確認に戻りたいと思います。それに1つ、あまり信じたくない噂を思い出しました」

天音は集める事ができたFクラスの情報^{データ}からでは決め手がないため、状況を確認するために教室に向かい歩き出し、美春は天音の後を追いかけて行く。

「真海さん、どうしたんだい？」

「天音ちゃん？」

「……」

中央階段を完全に抑えているため、天音と美春は安全に教室まで戻ると源二と美紀が天音に声をかけるが天音は右手の人差し指を立てて口元に運び、静かにするように2人に頼むと、

「回復試験をしておこうと思ったんです。補習室はやっぱ嫌ですから、戦った限りはFクラスは突撃しかできないようですから、どうやら、作戦も立てられない。もしくは作戦を覚えられないくらいの脳容量しかないみたいです」

『……………Fクラスにいる土屋くんは盗聴をしていると言う噂を聞いた事があります。坂本ちゃんと土屋くんは1年時にも同じクラスですし、その噂が本当かどうかはわかりませんが警戒する必要はあります。適当に話をして必要な事は筆談でお願いします』

天音は口ではFクラスをバカにするように言うが、何かを警戒しているようでクラスメート達に見えるように黒板にクラスメートに本当に伝えたい事を書き込み、

「それじゃあ、特に何も考えないでDクラスに仕掛けてきたって言うのかい？」

『……………流石にそれはないと思うけど』

『……………待て。平賀、俺達も盗聴や盗撮には心あたりがある。もしかしたら、その土屋ってヤツが寡黙なる性職者^{ムツリーニ}かも知れない』

源二は天音の警戒はやりすぎだと言いながらも天音の指示に合わせて男子生徒達がざわざわとし始めた後に天音の言っている事は正しいかも知れない事を源二に知らせる。

第15問

『……』

『天音ちゃん、『……』は書く必要はないんじゃないかな？』

『気分です』

天音はクラスメートの言葉に少し考えるような素振り見せるとそれを表現したいようで黒板に『……』と書き、美紀は苦笑いを浮かべながら天音にツツコミを入れる。

『……となるとやはり、教室の会話^{こわ}は聞かれている可能性は高いですね。重要な事は筆談でお願いします。後は余計な事を話してください……違いますね。なるべく、私達が油断しているように見せかけるため、Fクラスをバカにしてください』

『待ってください。試験召喚戦争中に盗聴なんてバレたら停学ものですわよ』

『……携帯電話でも停学だしね』

天音は盗聴はあると判断してクラスメートに指示を出すが源二と美春はそこまでの危険を起こしてこないと思っているようで天音にそこまでの警戒は必要はないと言いたさそうである。

『そうです。バレたら停学ですがバレなければ合法です。手段を選ばなくても良いのなら、正直、私も情報^{データ}収集に使いたいです』

『いや、代表としてそれは止めさせて貰うよ』

『……仕方ありませんわね』

源二は合法だと言い切る天音の姿にため息を吐き、美春は何かあるのか自分の席に移動すると自分のカバンを漁り始め、

『美春ちゃん？』

『……盗聴器、ありますわ』

『……清水さん、それは何？』

『気にしないでください』

美春はカバンから小さな機械を取り出して電源を入れるとその機械は小さなノイズ音を発し、美春は盗聴器がある事を確信したようである。

『……真海さん、美春は盗聴器の取り外しにかかりますわ』

『……美春ちゃん、お願い。偽情報を流すのに使えるから壊さないでね』

『了解しました』

美春は天音に視線を送ると天音と美春の中ではアイコンタクトが成立したようでお互いに親指を立てて意志の疎通を確認すると源二は付いて行けないようで大きくため息を吐く。

『代表、皆さん、情報の整理をしたいと思いますので協力をお願いします』

『『『『了解』』』』』

『情報収集の範囲を狭めます。土屋くん以外で、Fクラスの生徒、及び、知り合いのFクラス候補で1教科だけでも得点が高い生徒を知っていたら教えてください。言い方は良くないのですが去年の成績が悪い人間がFクラスに固まっているはずです。去年のクラスメートでバカだと思った生徒は十中八九いるはずです。Aクラスとは逆の意味で情報は集めやすいはずです』

天音は改めてFクラス生徒の情報を集め始めるとすでにその頃にはDクラスの生徒達はおかしなテンションになっているようで筆談はすでにノリノリになってきており、

『……このクラスは本当に大丈夫なのかな？』

『代表、みんな、楽しんでるし、良いんじゃないかな？ 試召戦争で空気がピリピリしてるよりは楽しいと思うよ。天音ちゃん、私もデータ分析を手伝うよ』

『美紀ちゃん、お願いします』

源二はクラスメート達の様子に肩を落とすと美紀は心配ないと声をかけると美紀の言葉に多くのクラスメート達は苦笑いを浮かべながら頷き、

『……わかったよ。クラスの意見を聞くのも代表の仕事だね。真海さん、俺も手伝うよ』

源一は1度、ため息を吐いた後に美紀と一緒に天音の手伝いを始める。

第16問

(……試召戦争が始まって1時間ですね。しかし、Fクラスの戦い方がおかしいですね。仕掛けてきたわりには戦闘の意思が見えませんが、前線ではなく、^{クラス}国単位で凄味が感じられません)

Fクラスとの試召戦争が始まって1時間が経つが試召戦争は最初の
一当てからは特に激しい戦いもなく、天音は集めたFクラス^{データ}の情報を
見つめながら眉間にしわを寄せる。

(……改めて集めた情報^{データ}から見れば、Fクラスで代表を単体教科で
倒せそうなのは土屋くんの保健体育、これは学年トップレベル。そ
して、島田美波さん、美春ちゃんと言うにはドイツからの帰国子女
で日本語が読めないからFクラスに入ったはずだと言う事、日本語
の少ない数学はBクラス程度。目だった成績をとっているのはこの
2人。島田さんは数学の成績を考えれば元々の頭は悪くないと思う
けど……『彼氏にしたい女子ランキング』の上位入賞者と言う事を
考えると作戦系はダメだと思って良い)

天音は新たに手に入れた『島田美波』^{データ}の設定から警戒は必要ではあ
るが戦況に影響はないと判断したようでノートに書いてあるFクラ
ス代表『坂本雄二』の名前に目を止め、

(……何を考えているんだろう？ こう言う時は初心に戻ると良い
考えが浮かぶんだよね。Fクラスの情報^{データ}を見れば奇襲や奇策でしか
Dクラスには勝てないはずなのにこんなに時間をかけて?)

天音は初心に戻ろうと生徒手帳の試召戦争のルールを開いた時に彼
女の思考は何かに行きついたようで確認するかのように勢いよくノ

ートをめくり、まとめてあるFクラスであろう生徒達の名前を全て確認して行くと、

（……これって、そう言う事？ 盲点だった。完全に頭から排除してた）

『……天音ちゃん、何かわかったの？』

天音は勢いよく立ちあがると美紀が筆談で質問し、天音は大きく頷くと黒板の前に移動する。

『真海さん、何かわかったのかい？』

『はい。これはまだ予想の域を脱していませんが、Fクラスには成績上位者が紛れ込んでいます』

『真海さん、何を言い出すんですか？』

天音は黒板の前に移動するとFクラスに成績上位者がまぎれている可能性を示唆すると誰も信じられないようで教室はざわざわとし始めるが、

『単体教科や去年の情報^{データ}、Dクラスとの成績の比較から考えるとFクラスの総合点数1000点以下だと推測します』

『それなら、成績上位者がいるわけがありませんわ』

『これは仮定の話です。まだ、確証はありません。成績上位者がFクラスにいるとします。その成績上位者はどうしてFクラスにいますか？』

天音はFクラスに成績上位者がいるとしたら何があるかと聞くが誰も思い浮かばないようであり、

『1つはなりたかったから、Fクラスに入った。試召戦争をやつて下位クラスから一気にAクラスまで駆け上つてみたい。上がいればいるほど燃える迷惑なタイプの人間』

天音の黒板に書いた言葉は誰かと重なったようであり、クラスメイト達は全員で天音を指差し、

「ち、違います。私は殺意になんか溢れていません!？」

天音はクラスメートの行動に恥ずかしくなったようで筆談をしていた事など忘れて顔を真っ赤にして声を張り上げる

第17問

『真海さん、落ち着いて。話を続けて』

源二は苦笑いを浮かべると天音の肩を叩き、ノートに書いた言葉を見せると天音は1度、大きく深呼吸をし、

『成績上位者のこのタイプは正直、どうでも良いです。Fクラスの坂本くん相手だと衝突してたいした結果は出せません』

『天音ちゃん、どうして、そんな事を言えるの?』

天音は戦闘的な成績上位者は雄二とはそりが合わない決めつけ、美紀は首を傾げる。

『坂本くんは言い方が悪いですけど、今も昔を他人をバカにしています。昔は神童だったから、自分以外はバカ、今は元神童の俺が本気を出せば他の人間が敵うわけがないって感じです。そのため、あまり、友人と言える人間がいません。使者にきた吉井くと去年のクラスメートからの話、私の過去の記憶を総合した結果です』

『それはムカつきますわね』

天音は雄二が人を見下していると事をクラスメートに伝えると美春を中心にした多くのクラスメート達は不機嫌そうな表情をする。

『好戦的な成績上位者はバカだと思っている生徒を上手く使う気であるだけであり、目障りな代表は邪魔者以外の何者でもありません。まあ、指揮系統を見ると対立をしている様子はありませんから、こ

のタイプはいないと判断して良いでしょう』

『なら、他にどんなタイプの成績上位者がいるんだい？』

『代表、思い出してください。文月学園^{ウチ}は何主義ですか？』

『実力？ ……違うね。実戦主義かな？』

『そうです。実戦主義なんです。いくら、テストで良い点を取つていようとそれが本番で生かせなければ意味がない』

天音は源二に文月学園が掲げているものは何かと尋ねると源二は自信がなさそうに答え、その答えは天音が求めていたものであり、彼女は大きく頷き、

『『彼女』は振り分け試験で欠席もしくは途中退席をして総合得点が0点の生徒です』

『彼女？ 真海さんはそれが誰か予想は付いているのかい？』

『誰なんですか？』

天音は雄二が隠し持っているのは振り分け試験を受ける事が出来なかった生徒だと推測するとクラスメート達は天音の次の言葉を待っているように息を飲み、

『……姫路瑞希、彼女がFクラスのジョーカーです』

天音は黒板に『姫路瑞希』と大きく書くとその名前を教室のクラスメート達は全員知っているように驚いたようだが声を漏らさないよ

うに口を両手で塞ぐ。

『待つて。真海さん、どうして言い切れるんだい？』

『先ほども言いましたがFクラスとAクラスは情報を集めやすいんです。その中で得た情報です。彼女は身体が弱いと言う設定が書かれています』

天音は先ほど集めた情報データにあつたとAクラス候補の生徒のノートを見せると瑞希のページには『病弱』と記されており、

『誰か、振り分け試験で姫路さんと同じ教室で試験を受けた方はいませんか？』

『……そう言えば、振り分け試験は一緒じゃなかったけど、試験が終わった後に吉井が姫路が倒れたとか、その時の教師の対応が悪かったとか文句を言っていたな』

『そう言えば、俺も聞いた』

天音は情報データに信憑性を持たせたいようで瑞希と同じ教室で振り分け試験を受けた生徒を探すと天音の言葉に去年、明久と同じクラスだった生徒が手を上げ始め、

『……決まりですね。代表、これから、全軍を持つての総攻撃を提案したいと思います』

『待つてよ。真海さん、姫路さんがいるかも知れないならもっと慎重にならないと』

『違います。代表、時間を伸ばすと彼女の点数が上がるんです。試験戦争が始まって1時間弱、開戦後から回復試験を受け始めたとして現在は2教科目です。総合得点勝負にすれば彼女は倒せます。彼女の受けたテストで仕掛けられても直ぐにその教科以外に替えれば彼女は倒せます。時間がありません。代表、出撃許可を』

『……わかったよ。Dクラスは全軍を持ってFクラス坂本雄二の首を獲る。真海さん、前線の指揮は任せるよ』

天音は総攻撃を源二に提案し、源二は時間をかけられない今の状況ではリスク覚悟にならないといけない事を理解したようでDクラスに総攻撃の指示を出す。

第18問

『それでは指示を出します。美春ちゃん、集めた盗聴器はどこですか？』

『ここにありますが、どうするつもりですか？』

天音は美春に取り外した盗聴器の事を聞き、美春は集めた盗聴器を指差す。

『天音ちゃん、何をするの？』

『せっかくの盗聴器ですから利用させて貰おうと思って、私達がFクラスを舐めていて全力で仕掛けるつもりはなく、ほとんどの生徒が教室に残っているように見せかけます』

『見せかけるって、どうするつもりですか？ 美春達は全員で総攻撃をかけるのではないですか？』

天音は懐からボイスレコーダーを取り出すと先ほどまでの教室の会話を録音していたようでFクラスをバカにする会話を盗聴器が音を拾うように配置を始め出し、

『……真海さん、どうして、そんなものを持っているんだい？』

『TRPGプレイヤーとして当然の持ち物です。キャラクターを演^ル技した時の会話を残しておくために必要な物です。そうやってキャラクターに『魂』を込めて自分とキャラクターに一体感を持たせて行くんです。標準装備品です。これを持っていないプレイヤーはキ

ヤクターにおける『愛』が足りません！！　ここは重要なので覚えておいてください』

源二は状況が理解できないように眉間にしわを寄せるが天音にとってはボイスレコーダーは絶対に欠かせない物のようで黒板に書かれた『標準装備品』のところには赤いチョークで二重下線が引かれている。

『そ、そうなのですか？』

『当然です！！』

『天音ちゃん、暴走気味だから落ち着いて』

天音は何か火が点いたようで拳を握り締めるとその姿に若干、教室にいる生徒達は引き気味になり、美紀は苦笑いを浮かべて天音に落ち着かせようとし、

『……それでは次の行動に移りましょう。私達は部隊を3つに分けて少し、時間をあけて中央階段まで移動します。最初の部隊は私と美春ちゃんが率います。次は美紀ちゃん、最後は代表にお願いします』

『3つに分けて移動するのかい？　短期決戦じゃなかったのかい？』

天音は美紀からの言葉で自分を落ち着かせようと大きく1度、深呼吸をして戦闘前に高ぶった気持ちを落ち着かせ、総攻撃の前に教室に残っているDクラス生徒を3つに分けると事を伝えると源二は天音の作戦の意図がわからないように首を傾げる。

『最初の部隊が中央階段前に陣取り、今の部隊を4階に上げます。第2陣は2階に第3陣が到着したら、私達と代表の部隊は前進、2階と4階の部隊はFクラスの後方に回り込みます』

『挟み撃ちと言うわけかい？』

『そう言う事です。私と美春ちゃんが教室に戻ってくる前に伏兵がない事は確認してあります。まあ、元々、少数を伏兵に残して置くほどの予備兵力も火力もありませんけど』

『ええ。他の階の新校舎を確認させていただきましたわ。旧校舎も大部、奥まで行きました』

天音はFクラスの残りの戦力も計算しているようであり、美春も天音とともに行動していたため、伏兵は気にする必要はないと言い切り、

『それでは行きましょう』

『ええ』

天音と美春はDクラスにいた生徒の3分の1を引きつれて教室を出て行く。

第19問

「それでは健闘を祈りますわ」

「美春ちゃんも、天音ちゃんもね」

中央階段の後ろにDクラス全員が集まると美紀は所定の位置に移動を開始しようとする。

「……美紀ちゃん、戦闘開始は5分後です。こっちに注意を引きますからよろしくお願いします」

「うん。天音ちゃんもね。そうだ。天音ちゃん、良い事を思いついた。美春ちゃん、美春ちゃん、こっち来て」

「何ですか？」

天音と美紀は作戦の成功を確認すると美紀が何かを思いついたように美春を呼び寄せ、

「美春ちゃんも……」

「な、何を言っているのですか！？ なぜ、美春がそんな事を」

「良いから、良いから、天音ちゃん」

「私がかまいませんけど」

美紀は天音と美春の耳元で何かを頼み、美春は美紀の言葉に慌てる

が美紀は美春の背中を押して天音、美紀、美春の3人は顔を見合せて小さく笑みを浮かべると、

「『みなさんに女神アリアンロッドのご加護がありますように』」

3人は天音がよく遊んでいるTRPGの神に祈るように声を合わせると3人の様子にクラスメート達は一瞬、息を飲み、

「それじゃあ、3人の戦乙女が勝利に導いてくれる事を信じて総攻撃と行こうか？ みんな所定の位置に移動して」

『……まったく、代表までのせられるのかよ』

『まあ、せつかくの美少女3人が勝利を願ってくれたんだし、気合を入れられないとな』

『何？ 3人のためだけ？ 真海さん、玉野さん、清水さん、わたし達もやる。みんなでやろうよ』

源二は苦笑いを浮かべながら総攻撃の準備を指示するとDクラスの生徒達は総攻撃の前の割には落ち着いており、

「やりませんわ。こんな恥ずかしい事は2度としませんわ!!」

「流石にちょっと恥ずかしかったね」

「そうですね」

美春は盛り上がる女子生徒陣に恥ずかしいようで顔を真っ赤にする

と天音と美紀もちよつとだけ恥ずかしかったようで苦笑いを浮かべる。

「天音ちゃん、美春ちゃん、行ってくるね」

「はい」

美紀は自分の部隊を所定の位置に移動して行き、

「……それじゃあ。真海さん、行こうか？ Dクラス、進め！！」

「はい。Dクラス、真海隊、清水隊、動きます。一気にFクラス本陣まで攻め込みます！！ 良いですか、注意すべきは土屋くんの保健体育、島田さんの数学、この2教科は避けてください！！」

「良いですか。無駄な時間はかけられませんわ。一気にいきますわよ！！」

源二は総攻撃の指示を出すと、天音と美春はDクラスの生徒を鼓舞すると旧校舎に駆け出していく。

『な、何だ！？ Dクラスが攻めてきたぞ！！』

「Dクラス、真海天音隊」

「同じく、清水美春隊がFクラスに化学勝負を挑みますわ！！」

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

Fクラスは戦況が膠着状態になっていたため、油断をしていたよう

で、天音と美春の部隊の突撃に一瞬、対応が遅れ、廊下に陣取っていたFクラス一気に半減し、

『ちっ、不味いぞ。後ろに増援と奇襲の連絡を！？』

「……すいませんが、そんな事はさせません」

Fクラスの部隊長の1人が援軍要請とDクラスの強襲を伝えようと指示を出そうとするが天音の召喚獣の持つ1対の魔導銃からは光が放たれ、Fクラス部隊長の召喚獣を撃ち抜き、

「Dクラス本陣、真海さんと清水さんの部隊の援護を！！」

遅れて戦場に現れた源二が率いるDクラス本陣がFクラス前線部隊をすり潰し、Fクラス前線部隊全員を補習室送りにする。

第20問

天音と美春の部隊が前進するとFクラスの部隊が立っているがDクラスの突撃により、Fクラスの前線部隊が全滅した様子を見ていたためか、完全に浮足立っており、

「美春ちゃん、行きますよ!!」

「ええ」

すでにDクラス突撃部隊として連携を重ねている天音と美春の2人は流れるようにFクラス生徒を補習室送りに行き、

「……みなさん、そろそろ、援軍が来ますよ」

「全員、突撃じゃ!!」

天音はFクラスから増援が来る頃合いだった時、爺言葉でFクラスから突撃指示が出る。

「……爺言葉？ あれが木下くんですね？ 他には吉井くんと」

「そこにいるのは美波お姉さま!!」

天音は援軍にきたFクラスの生徒を自分の頭にある情報データと重ね合わせ始めると美春が女子生徒を見て目を輝かせ、

「美波お姉さま？」

「み、美春!？」

天音は美春の様子に首を傾げると美春の視線の先にいる女子生徒は美春を見て、後ずさりを開始する。

「美波お姉さま? ああ、美春ちゃんが言っていた。島田さん」

「こ、こっちに來ないで!? ウ、ウチは男が好きなのよ!? あんたも納得してないで助けなさいよ!？」

美春は試召戦争など関係なくなつたようで召喚獣と一緒に想い人『島田美波』に飛びついて行き、天音は2人の様子に納得が言つたようでポンと手を叩くと美波は天音に助けを求め、

「そんな事はありません!! お姉さまは美春の事を愛してくれてゐるはずです!!」

「そうなんですか。本当に同性愛つてあるんだ。初めて本物を見ました。美紀ちゃんがいれば喜んでくれたよね」

「ちょ、ちよつと、勘違いしないで!? ウチはノーマルだから!？」

天音は同性愛があるんだと頷くと美波は全力で否定するが、

「美春ちゃん、私、お友達として応援します。世間が、周りが認めてくれなくも私は美春ちゃんと島田さんを応援します」

「ありがとうございます。真海さん、いえ、今から美春は真海さんを友達として天音と呼ばせて頂きますわ!!!」

天音は美春の事を両手を握りしめて応援すると美春は天音の言葉にさらに勢いが増して行き、

「な、何で、そうなるのよ!? 吉井も見えてないで助けなさいよ!」

「よ、よし、島田さん、ここは君に任せた!!」

美波は全力で美春から逃げ出したいように明久に助けを求めるが彼は同性愛を理解できないように美春と美波から距離をとって行く。

「ちょっと待ちなさいよ!? 今、ウチは乙女としてピンチなのよ!」 『ここは僕に任せて!!』とかじゃないの!!」

「そんなセリフ、リアルじゃ通用しない……」

『い、命だけは助けてください!? な、何でもしますから!?!』

美波は距離を取る明久にもう1度、助けを求めるが明久は完全に美波を見捨てようとしており、彼女に背を向けた時、天音は明久がDクラスで行った命乞いを録音しておいたようにボイスレコーダーを懐から出して再生し、

「ちょっと、このタイミングで何をする気!?!」

「いえいえ、タイミング的には今しかないと思ひまして」

明久の命乞いの証拠にFクラスの生徒の視線は明久に集中する。

第21問

「……美春、ちょっと待っててくれない。ウチは今から吉井をグロテスクに殺さないといけないから」

「ま、待って。落ち着いてよ!? 美波もみんなも!? ぼ、僕は無実だよ。これは……」

美波を中心にFクラスの生徒の大半は試召戦争より裏切り者の明久を虐殺する事に目的がすり替わり始め、明久は誤解を解こうと言い訳を始めようとした時、につこりと笑っている天音と目が合い、Dクラスの教室で自分の身に起きた恐怖を思い出したようで顔を引きつらせる。

「ま、待つのじゃ!? 落ち着くのじゃ!? 雄二はこれはDクラスの罨じゃと言っておったのじゃ!?」

「……木下くん、よそ見とはずいぶんと戦場を舐めていますね」

秀吉はFクラスの生徒に落ち着くように説得を始めた時に、彼の袴姿に薙刀を持った召喚獣の前には天音の召喚獣が移動しており、

「……Dクラス、真海天音がFクラス部隊長木下秀吉の首を貫い受けます」

「な、何じゃと!?!」

天音の召喚は魔導銃キャリバーの引鉄トリガーを引き、秀吉の召喚獣を光が撃ち抜き、

「Dクラス攻めますよ！！ 『約束通り』、吉井くんには攻撃をしないようにお願いします！！」

『おう』

天音が部隊長である秀吉を討ち取った事にDクラスの士気はさらにあがり、天音は明久の裏切りを強調するように攻撃の指示を出す。

「……吉井、あんた、本当に裏切ってるみたいね？」

「ちが！？ 僕は裏切ってなんかいない！？ 何も、何もなかったんだって！？」

『い、命だけは助けてください！？ な、何でもしますから！？』

「ちょっと、何度もそれを流さないで！？」

美波は背中に天音にも負けない殺意をまとって明久を追いつめると明久は顔を真っ青にして裏切りを否定するがその姿がさらに疑いの色を濃くしているようで明久の周りはFクラスの生徒に囲まれて行き、

「美春ちゃん、すいませんが、時間がないので島田さんを討ち取らせていただきます」

「天音、それなら、お姉さまは美春の手で討ちますわ！！」

天音と美春は明久を囲んでいるFクラスの生徒に襲い掛かり、

「お姉さま、どうして、お姉さまは美春ではなく、そんな豚野郎を

「見ているのですか？」

「み、美春？」

美春は美波の名前を呼ぶと彼女はどうかやら思い込みが激しいようで美波を巻き込んでおかしいな空気を作りだし、美波は美春の様子に顔を引きつらせると美春の召喚獣は美波の召喚獣を薙ぎ払い、美波を補習室送り手前まで追い込み。

「お姉さま、勝負はつきましたね？」

「み、美春！？ い、嫌ッ！？ 補習室は嫌あッ！？」

美波は我に返ったようで顔を蒼白にして補習室には行きたくないと叫ぶが、

「補習室？ お姉さま、今ならベッドは空いてますから、天音、少しだけ外しますわ」

「うーん。美春ちゃんが抜けるのは少しきついかも知れないけど応援するって言ったし、こっちはどうにかするよ」

「よ、吉井！！ 早くフォローを！！ このままだとウチは補習室より危険な気がするの！？ あんたもどうして美春を応援するのよ！？」

美春は美波を補習室に送るつもりはないようで彼女の手を握ると2人でどこかに移動しようとし、明久と美波以外を蹴散らした天音は2人の背中を見送ると美波は余程あせっているのか先ほどまで命を狙っていた明久に助けを求める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0473x/>

バカとテストと戦略眼

2011年10月12日07時11分発行